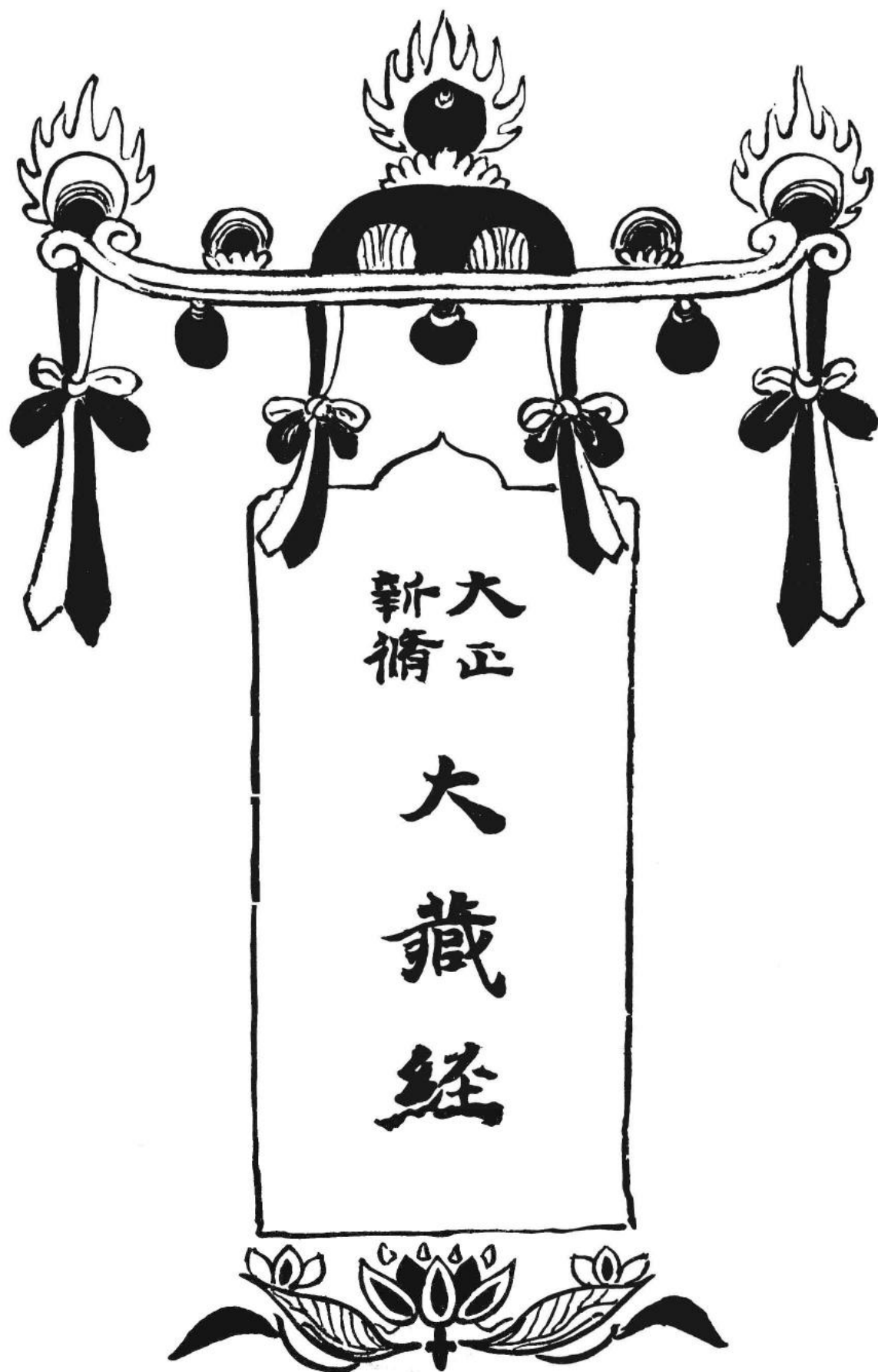


大藏經

釋淨空敬題





目次

一七六五 大般涅槃經玄義 (二卷) [cf. Nos. 375, 1766, 1767] 隋 灌 頂 撰 一

一七六六 涅槃玄義發源機要 (四卷) [cf. Nos. 375, 1765, 1767] 宋 智 圓 述 一五

一七六七 大般涅槃經疏 (三十三卷) [cf. Nos. 375, 1765, 1766] 隋 灌 頂 撰 四一

(一) 序 品 (一)	四二
(二) 純 陀 品 (三)	五二
(三) 哀 歎 品 (五)	六四
(四) 長 壽 品 (七)	七四
(五) 金剛身品 (八)	八二
(六) 名字功德品 (八)	八五
(七) 四 相 品 (九)	八六
(八) 四 依 品 (一〇)	九三
(九) 邪 正 品 (二)	九九
(一〇) 四 諦 品 (二)	一〇〇
(一一) 四 倒 品 (二)	一〇一
(一二) 如來性品 (二)	一〇一
(一三) 文 字 品 (三)	一〇九

(一四) 鳥 喻 品 (三)	一〇
(一五) 月 喻 品 (三)	一一
(一六) 菩 薩 品 (三)	一三
(一七) 一切大衆所問品 (三)	一八
(一八) 現 病 品 (三)	二〇
(一九) 聖 行 品 (三)	二二
(二〇) 梵 行 品 (七)	二六
(二一) 嬰兒行品 (九)	二九
(二二) 德 王 品 (三)	三五
(二三) 師子吼品 (三)	三七
(二四) 迦 葉 品 (六)	三七
(二五) 橋陳如品 (三)	三九

一七六八 涅槃經遊意 (一卷) [cf. No. 375] 隋 吉 藏 撰 一三〇

一七六九 涅槃宗要 (一卷) [cf. No. 375] 新羅 元 曉 撰 一三九

一七七〇 本願藥師經古迹 (二卷) [cf. No. 450] 新羅太寶撰 二五七

一七七一 彌勒經遊意 (一卷) [cf. No. 452] 隋吉藏撰 一六三

一七七二 觀彌勒上生兜率天經贊 (一卷) [cf. No. 452] 唐窺基撰 一七二

一七七三 彌勒上生經宗要 (一卷) [cf. No. 452] 新羅元曉撰 二九九

一七七四 三彌勒經疏 (一卷) [cf. Nos. 452, 454, 456] 新羅憬興撰 三〇三

一七七五 注維摩詰經 (十卷) [cf. No. 475] 後秦僧肇撰 三二七

(一) 佛國品 (一) 三八

(二) 方便品 (二) 三三八

(三) 弟子品 (三) 三四三

(四) 菩薩品 (四) 三〇

(五) 文殊師利問疾品 (五) 三七〇

(六) 不思議品 (六) 三八一

(七) 觀衆生品 (六) 三八三

(八) 佛道品 (七) 三九

(九) 入不二法門品 (八) 三九六

(一〇) 香積佛品 (八) 三九九

(一一) 菩薩行品 (九) 四〇三

(一二) 見阿閼佛品 (九) 四〇九

(一三) 法供養品 (一〇) 四一三

(一四) 囑累品 (一〇) 四一八

一七七六 維摩義記 (八卷) [cf. No. 475] 隋慧遠撰 四一一

(一) 佛國品 (一本—末) 四二二

(二) 方便品 (一末) 四三九

(三) 弟子品 (二本—二末) 四四四

(四) 菩薩品 (二末) 四六〇

(五) 文殊師利問疾品 (二末—三本) 四六九

(六) 不思議品 (三本) 四七六

(七) 觀衆生品 (三本—三末) 四八〇

(八) 佛道品 (三末) 四八六

(九) 入不二法門品 (三末—四本) 四九一

(一〇) 香積品 (四本) 四九八

(一一) 菩薩行品 (四本) 五〇三

(一二) 見阿閼品 (四末) 五〇八

(一三) 法供品 (四末) 五一三

(一四) 囑累品 (四末) 五一七

一七七七 維摩經玄疏 (六卷) [cf. Nos. 475, 1778, 1779] 隋智顗撰 五一九

一七七八 維摩經略疏(十卷) [cf. Nos. 475, 1777, 1779] 唐 智顗說·湛然略 五六二

(一) 佛國品 (一三)	五六二	(七) 佛道品 (九)	六八三
(二) 方便品 (三)	五九八	(八) 入不二法門品 (九)	六八九
(三) 弟子品 (四—五)	六〇八	(一〇) 香積品 (一〇)	六九五
(四) 菩薩品 (五—六)	六三三	(一一) 菩薩行品 (一〇)	六九八
(五) 問疾品 (六—七)	六四九	(一二) 阿閼佛品 (一〇)	七〇三
(六) 不思議品 (七)	六六七	(一三) 法供養品 (一〇)	七〇六
(七) 觀衆生品 (八)	六七一	(一四) 囑累品 (一〇)	七〇八

一七七九 維摩經略疏垂裕記(十卷) [cf. Nos. 475, 1777, 1778] 宋 智圓述 七一

(一) 佛國品 (一—四)	七一	(八) 佛道品 (一〇)	八二四
(二) 方便品 (四—五)	七五六	(九) 入不二法門品 (一〇)	八三九
(三) 弟子品 (五—七)	七六九	(一〇) 香積品 (一〇)	八四四
(四) 菩薩品 (七—八)	七九七	(一一) 菩薩行品 (一〇)	八四六
(五) 問疾品 (八—九)	八〇九	(一二) 阿閼佛品 (一〇) (從菩薩行品末至阿閼品中落紙)	四九
(六) 不思議品 (九)	八二二	(一三) 法供養品 (一〇)	八五〇
(七) 觀衆生品 (九)	八二五	(一四) 囑累品 (一〇)	八五〇

一七八〇 淨名玄論(八卷) [cf. Nos. 475, 1781] 隋 吉藏造 八五三

一七八一 維摩經義疏(六卷) [cf. Nos. 475, 1780] 隋 吉藏撰 九〇八

(一) 佛國品 (一—三)	九一八	(八) 佛道品 (五)	七〇
(二) 方便品 (三)	九三一	(九) 入不二法門品 (五)	九七五
(三) 弟子品 (三)	九三五	(一〇) 香積品 (六)	九七八
(四) 菩薩品 (四)	九四九	(一一) 菩薩行品 (六)	九八二
(五) 文殊師利問疾品 (四)	九五四	(一二) 見阿閼佛品 (六)	九八五
(六) 不思議品 (四)	九六一	(一三) 法供養品 (六)	九八八
(七) 觀衆生品 (五)	九六五	(一四) 囑累品 (六)	九九〇

一七八二 說無垢稱經疏(六卷) [cf. No. 476] 唐 窺 基 撰 九九三

(一) 序 品 (一本—二末)	九九三	(八) 菩提分品 (五末)	一〇八六
(二) 顯不思議方便善巧品 (三本)	一〇三三	(九) 不二法門品 (五末)	一〇九一
(三) 聲聞品 (三本—四本)	一〇四〇	(一〇) 香臺品 (六本)	一〇九三
(四) 菩薩品 (四本—四末)	一〇五七	(一一) 菩薩行品 (六本)	一〇九八
(五) 問疾品 (四末—五本)	一〇六八	(一二) 觀如來品 (六末)	一一〇四
(六) 不思議品 (五本)	一〇七七	(一三) 法供養品 (六末)	一一〇八
(七) 觀有情品 (五本—五末)	一〇八一	(一四) 囑累品 (六末)	一一一二

大般涅槃經玄義卷上

隋天台沙門灌頂撰

夫正道幽寂無始無終。妙理虛玄非新非故。無始而言其始者。謂之無明生死。無終而語其終者。即是種智涅槃。無明生死本自有之名之爲故。種智涅槃修因方克目之爲新。此經乃於非始之始。分別佛性三因之殊。還就無終之終。辨於涅槃三德極果之別。若佛性之因非因。涅槃之果非果。是則因如不異果。果如不異因。若因如不異果。非止涅槃之如非新。佛性之如亦復非新。若果如不異因。非止佛性之如非故。涅槃之如亦復非故。是則佛性涅槃因果之如。皆是非新非故。非新非故之理即是法身。非新而新之果即是摩訶般若。既有非新而新種智之圓極。則非故之故無明生死患累究竟斯亡目之解脫。此則三德之義宛然。不縱不橫妙等伊字。但衆生利鈍不同。是以大聖赴緣之教亦有頓漸之別。頓則譬於忍辱之草牛食即得醍醐。漸則五味階級次第圓滿。或有不定根緣爲赴此。機所說教門非頓非漸。喻之置毒於乳也。皆是能仁妙窮權實巧赴根緣。化他利物罄無乖爽。今此大經爲欲開通往昔教門。顯發如來方便密義故。於娑羅雙樹大師子吼。師子吼者名決定說。決定說者說一切衆生悉有佛性如來畢竟不入涅槃。不入涅槃

即是入於無上大乘大般涅槃。此經若具依梵本。應云摩訶般涅槃經修多羅。摩訶言大般涅槃。此翻滅度。釋此三字具依兩義一別二通。第一別釋者大即法身。故此經云。所言大者其性廣博猶若虛空。其性即法性法性即法身也。滅者即是解脫。解脫二種煩惱生死永滅。免斯因果患累即解脫義也。所言度者即是摩訶般若。故大論云。信爲能入智爲能度。當知別以三字標今經之目。即是三德之異名也。第二通釋。大者謂大法身大般若大解脫也。滅者即是三德皆寂滅也。度者即是三德皆究竟圓滿也。故通以三字標名表三德。皆大寂滅究竟也。別通之義雖殊。然並是用非果之果無上祕密之極果。以標一教之首也。修多羅即是聖教之總名。有翻無翻事在別釋。若具依梵本。應言摩訶般涅槃。今翻爲大滅度。大若虛空不因小相。又其性廣博多所容受。又名不可思議諸佛之法界。是爲三義釋大也。滅者滅二十五有及虛偽物。又得二十五三昧種種示現。又生滅滅已。寂滅爲樂。是爲三義釋滅也。度者度於不度。又度於度。又度此彼之彼岸。亦度非彼岸之彼岸。譬如神龜水陸俱度。是爲三義釋度也。總攬三法三目三點名大般涅槃。金剛寶藏滿足無缺。不縱不橫並不別微妙祕密以當其體。常住不變恒安清涼不老不死以當其宗。置毒佛性遍五味中味殺人。震大毒鼓雖無心欲聞聞之皆死。八大自在我以當其用。常住二字無上醍醐與諸典別決定之吼

以當其教。名含體攝常宗毒用極教之相也。玄義開爲五重

一釋名 二釋體 三釋宗 四釋用 五釋教

釋名又五。謂翻通無假絕。翻者四說。謂無有亦有亦無非有非無。初言無者。天竺五處不同。東南中三方奢切小殊。西北兩處大異。如言摩訶。摩醯。泥洹。泥洹。此則三方。如言洹隸。般涅槃。般涅槃。此則二方。類如此間楚夏耳。有人以泥洹目雙卷。泥洹目六卷。涅槃目大本。是義皆不然。雙卷明八十無常。六卷明金剛不毀。豈可以方言簡義。毘婆沙云涅槃。今經無那字。蓋譯人存略耳。肇論以摩訶涅槃。爲彼土正音。古今承用。其各說者凡有五家。一廣州大亮云。一名含衆名。譯家所以不翻。正在此也。名下之義。可作異釋。如言大者。莫先爲義。一切諸法莫先於此。又大常也。又大是神通之極號。常樂之都名。故不可翻也。二云名字是色聲之法。不可一名累書衆名。一義疊說衆義。所以不可翻也。三云。名是義上之名。義是名下之義。名既是一。義豈可多。但一名而多訓。例如此間息字。或訓子息。或訓長息。或訓止住之息。或訓暫時消息。或訓報示消息。若據一失諸。故不可翻。四云。一名多義如先陀婆一名四實。關涉處多不可翻也。五云。祇先陀婆一語隨時各用。智臣善解契會王心。涅槃亦爾。初出言涅槃。涅槃即生也。將逝言涅槃。涅槃即滅也。但此無密語翻彼密義。故言無翻也。二云有翻者。梁武云。

佛具四等隨其類音薄告衆生。若不可翻此土便應隔化。四等亦是不遍。引釋論般若尊重智慧輕薄。既得以輕代重。何得不以真丹。單別翻天竺兼含。既可得翻且舉十家。一竺道生。時人呼爲涅槃聖。翻爲滅。引文云。聞佛唱滅悲哀請住。魔王所以勸令速滅云云。二莊嚴大斌。翻爲寂滅。引文云。生滅滅已寂滅爲樂。前家止滅於生。後家滅生復滅於滅。故言寂滅云云。三白馬愛。翻爲祕藏。引文云。皆悉安住祕藏中云云。四長干影。翻爲安樂。引文云。如人病差名爲安樂。安樂名涅槃。五定林柔。翻爲無累解脫。既無創疣即無累也。六太昌宗。翻爲解脫。引四相品云。涅槃名解脫。迦葉品云。慈悲即真解脫。解脫即大涅槃。七梁武。翻爲不生。引文云。斷煩惱者。不名涅槃。不生煩惱乃名涅槃。八肇論云。無爲亦云滅度。九會稽基。偏用無爲一義爲翻也。十開善光宅。同用滅度。引文云。大覺世尊將欲涅槃。引六卷云。大牟尼尊今當滅度。彼此兩存正是翻也。例大本稱娑羅雙樹。六卷云堅固林。又引法華長行云。中夜當入涅槃。後偈云佛此夜滅度。又引華嚴云。古來今佛無般涅槃。除化衆生方便滅度。又引遺教。佛臨涅槃略說教誡。又云。時將欲過我欲滅度。是爲十家明有翻也。三明亦可翻亦不可翻者。寂師云。秦言謬者定之以方冊。梵音不可變者即而書之。匠者之公謹受者之重慎。今經翻摩訶爲大。般涅槃三字存梵音。是則一字可翻三字不可翻。梵漢雙題正應在此。四云

大名不可思議。故非可翻非不可翻。今明。漢人多不曉梵即有衆說。莫知孰是。世既咸用開善未能異之。今雖同其翻不用其義。同翻者摩訶此翻爲大。般涅槃此翻爲滅。槃那此翻爲度。是爲大滅度也。有翻無翻四家竟。次出開善四解。一云。滅據法度據人。生死之法滅已還無。生死之人轉而作佛。二云。滅名目無。滅有還無故。度名目有。從此至彼故。實法道邊人法俱滅。相續道中人法俱度。三云。滅是有餘度是無餘。有餘涅槃既未究竟止可是滅。無餘永免方得是度。四云。滅是自有今無之義。而加以度者是永免之名。欲明凡夫之死亦得是滅而非永免不得稱度。觀師難初解云。若生死之法滅無。生死之人附何而度。若生死假人轉得成佛。生死之法何不轉爲涅槃。今研初解是何等義。若依聲聞法者。三果生死未併滅假人不永度。若第四果凡法因雖滅凡法果未滅。假人猶未度。若灰身滅智假法俱寂。寂則不論度。又不得作佛。若菩薩法者。凡法都不滅假人又不得度。是誰法滅何等入度。如此往推非三藏義也。若依聲聞菩薩共法者。三乘之人同以無言說道斷煩惱入第一義。即體生死法是涅槃法不論滅與不滅。即生死人是涅槃人。不論度與不度。既無法可滅何用以滅目之。既無人可度用度目誰。如此推之則非通教義也。若獨菩薩法非但滅生死之僞法。亦滅涅槃之真法。非但度生死之凡人。亦度出世之聖人。彼師言不涉真法語不論聖人。以此往推非別教

義也。若就佛法者。滅之與度。不縱不橫無二無別。彼師分滅異度離法論人。如此往推非圓教義也。既非小。非共。非菩薩。非佛。並非先聖之法言。則不敢道也云云。今研第二解。若以滅目無以度目有者。若受此有無。猶是苦諦。執此有無猶是集諦。修此有無猶是道諦。盡此有無猶是滅諦。滅諦之真尚不可以有無名之。云何以有無名大涅槃。如此往推非三藏真義。若以滅目無以度目有。若雙目生生死死本自不然。今則無滅。生死既無滅以滅目誰。生死本自不然那得是有。非有則無度法亦無度者。度復目誰。既不可以滅度目於生死。云何以滅度目於涅槃。疆以疣贅累彼虛空。以此推之非是聲聞菩薩共法。若以滅目無以度目有者。此以名召法以法應名。名物尚存爲見所縛。云何以見義釋大涅槃。若以滅目無門以度目有門者。爲目小門。爲目大門。小門能通拙所通僞。貪住化城久已被棄。云何以拙能通釋大涅槃。若以滅目無以度目有。明真俗二諦者。此是偏邪二邊。云何以二邊釋中道大涅槃。如此往推則非菩薩法也。若以滅目無以度目有。有不關無不關有。滅非是度。度異於滅。縱橫狼藉。劫掠群牛不解。鑽搖。漿猶難得。況酥醍醐。如此往。推則非佛法。既非小乘。非大乘。非菩薩乘。非佛乘。是何等義邪云云。今研第三解。若有余涅槃既未究竟止可是滅。無餘永免方得稱度者。亦應滅度。四住非是究竟滅度。塵沙方得稱度。又滅度塵沙亦非究竟。滅度無

明。方得稱度。又滅度無明亦非究竟滅度。究竟滅度方得稱度。以後望前非究竟。第二第三亦非究竟。何得以初番滅度釋大涅槃。云今研第四解。凡夫已有還無得是滅。亦應凡夫從此至彼應是度。若凡夫非度。凡夫亦復非滅。若聖人已還無亦得是滅。聖人從此至彼復應是度。若凡聖俱度俱滅。若爲論異。若同凡聖則近狹非高廣。若異凡聖亦非高廣。非高故則非無上。非廣故則有邊涯。云何以此釋大涅槃。若具研四解。應作四四十六番。今但十番而已。餘皆可明。明哲自解。何俟多言。時人以開善爲長。故遠研之。餘人置而不言耳。翻名已如前說。釋其大義者。大有三義。一理大。二智大。三用大。釋論謂大勝。大取包廣。多取含攝。勝取秀出。今言。法身法界遍一切處。是廣大義。報身智境照發相應不可窮盡。是含攝義。應身自在無能退絕。是勝出義。於一大字三法具足不縱不橫。不可思議。名祕密藏。祕密藏者即大涅槃。釋般涅槃爲滅滅有三義。謂性滅。圓滅。方便滅。性滅者理性至寂非生非起。生起不能喧動故名性滅。圓滅者照無不遍發無不足。明窮境極故名圓滅。方便滅者權巧妙能。這必會取必克故名方便滅。如是三滅即三解脫。無縛無脫。是性淨解脫。因果畢竟。是圓淨解脫。巧順機宜無染無累。是方便淨解脫。於一滅字三脫具足不縱不橫不可思議。故名三點。三點者即大涅槃。釋般那爲度。度有三義。謂實相究竟度。智究竟度。事究竟度。實相度者

諸佛之師也。非此非彼亦非中流。非能非所無始無終故名實相度。佛師度故諸佛亦度。論云。智度大道佛善來。智度大海佛窮底。即其義也。智度者如智稱如如境。兩大蓋大照發相應故名智度。論云。智度相義佛無礙。即其義也。事度者自度度他。彼我利益無不究竟。慈悲誓願一切周悉故名事度。如此三度即三般若。實相般若若一切種智與諸佛同體。觀照般若若一切智與諸佛同意。文字般若若即道種智與諸佛同事。於一度字三智具足不縱不橫不可思議。故名面上三目。三目者即大涅槃。今作三番九義。淺深別異。各不同者。雖復多含攝勝未是今經正意。文云。法身亦非。那可單作三身釋大。文云。解脫亦非。那可單作三脫釋滅。文云。般若亦非。那可單作三智釋度。故知單釋非今經意。意者文云。三法具足名大般涅槃。三法即三智三智即三點。三法即九法九法即三法。三法即九法是不縱。九法即三法是不橫。不並不別亦復如是。不三而三不一而一所以名祕密藏。攝一切法悉入其中。是諸佛體。是諸佛師都名總號。乃爲具足稱大涅槃。意在此耳。一智三智三智一智。所以名一面三目。涅槃亦耳。一脫三脫三脫一脫。所以名爲伊字三點。涅槃亦爾。體意及事。不得相離不得相混。不可言言不可思思故名大涅槃。二釋通名者。涅槃之名遍布諸處。安樂一意亘十法界皆稱安樂。梵行品云。寒地獄中若遇熱風以之爲樂。熱地獄中若遇寒風以之爲樂。如是安

樂亦名涅槃。獼猴得酒則能起舞騰枝躍樹。秋水卒至河伯欣然魚鼈噉喝飲沫戲沼。如是安樂亦名涅槃。餓鬼飢渴得水食飽滿則得安樂。如是安樂亦名涅槃。修羅怖畏得歸依處則得安樂。如是安樂亦名涅槃。如貧得藏如病得差。則得安樂。如是安樂亦名涅槃。檀提婆羅門。飽食撫腹。我今此身即是涅槃。此計欲界果報法爲涅槃。阿羅羅仙得無想定。此計色界法爲涅槃。鬱頭藍弗得非想定。此計無色界法爲涅槃。文云。斷欲界結則得安樂。乃至斷無色界結則得安樂。如是安樂亦名涅槃。此多用善因爲涅槃也。若三十三天常樂我淨用善果爲涅槃也。若修二乘者多貪欲人得不淨觀則得安樂。如是安樂亦名涅槃。乃至數息慈心念佛因緣亦如是。此計二乘方便法爲涅槃也。若斷三界煩惱。八萬六萬四萬二萬一萬住處。則得安樂。如是安樂亦名涅槃。此計二乘果法爲涅槃也。釋論云。菩薩從初發心。常觀涅槃行道。初心菩薩亦名涅槃。此文云。十住菩薩雖見不了了亦名涅槃。諸佛法王聖主住處。乃得名爲大般涅槃也。涅槃之名隨情逐事浩蕩若此。蓋是通名也。達摩辭多羅翻此法勝。解云。煩惱滅名有餘涅槃。引經云。滅諸煩惱名爲涅槃。離於生死名無餘涅槃。引經云。離諸有者。乃名涅槃。此就所滅。釋二種涅槃也。二乘所得二涅槃。若於如來皆是有餘。唯佛乃是無餘。引勝鬘云。二乘是有餘如來是無餘。昔滅是盡今滅非盡。經云。不應生滅盡想。涅槃非滅。

非滅故常也。若依舊多之解。乃是通涅槃。今昔相對一塗之說。若擘肌分理義則不然。何者二乘有餘無餘。所滅則異真諦則同。若於如來皆是有餘。唯佛是無餘者。若爾二乘既有餘涅槃。子縛斷破無明。入菩薩位見佛性。生死身謝即應同佛入無餘涅槃。何事被訶言非。不斷煩惱。不到彼岸破除草庵。若此等皆無分者云何對佛是有餘涅槃。又若二乘有餘無餘對佛而得是有餘涅槃者。自地獄已上至菩薩已還例應如此。若諸涅槃皆不可得然。二乘安是。故知舊多羅之說不可依也。問安樂之名通十法界。佛性四德名復云何。答經云。一切諸法中悉有安樂性。一切衆生悉有佛性。豈非佛性通耶。文云。二十五有有我不耶。答言有我。寢言刀刀。又楊樹黃葉等豈非四德通耶。然名乃該通義不得混應作三番四句料揀。初四句。謂通別亦通亦別非通非別。通者如向說。別者各有所以。六道以安身適性爲安樂。猶起煩惱惡因。招生死苦果。安樂義不成。要斷煩惱使苦樂不復隨身憂喜不復隨心。得有餘無餘灰身滅智。隔別生死入于涅槃者則與六道別也。菩薩從初心爲一切衆生觀涅槃行道。望二乘是別望佛猶通。即是亦通亦別也。諸佛究竟大般涅槃。非六道之通非二乘之別。即非通非別之安樂也。又安樂之名。或是病非藥或是藥非病。或亦藥亦病或非病非藥。是病者長者沒已。劫掠群牛穀乳自食。漿酪醍醐一切皆失。如來去後鈔竊正法常樂之名。如蟲食

木偶得成字不識是非。廣起顛倒沈淪生死。隨其流處有種種名。或辛或酸。故知三界四倒但是病而非藥。爲治此病說四非常倒渴斯病。病去惑盡名入涅槃。文云。三種病中無三種藥。三種藥中無三種病。此小涅槃但藥而非病。雖復病去而藥不亡。還執此藥而復成病。文云。其後不久王復得病。當知四非常亦藥亦病也。治此病故還用常樂我淨而倒渴之。故斥無常病說於新伊。是勝三修不同凡夫之倒病。不同二乘之偏藥故名非藥非病。又新伊但是藥而非病。正法正性非藥非病之安樂也。又小而非大大而非小。亦小亦大非小非大。小者二乘也。雖斷煩惱猶有習氣。我身我衣我去我來。謂佛與己等。唯有常淨無有我樂。三寶差別則是習氣。所以爲小也。云何名大。諸佛如來豎出九界橫收一切。無邊底故常。大丈夫故常。能化度一切故常。不可思議故常。具八自在故我。斷苦樂故常。大寂故樂。一切知故樂。身常故樂。有大淨故樂。淨身淨心淨。是故名爲大涅槃。菩薩望下爲亦大。望上爲亦小。凡夫六道不斷通惑故非小。無四德故非大。例前應就理爲非小非大。互顯令易解耳。前一番從地獄已上料揀。次一番從外道已上料揀。次一番從二乘已上料揀。問如此料揀六道二乘既非安樂。何故強說爲涅槃耶。答通有四悉檀因緣故則作通說。云何更別問耶。所以作通說者爲悅衆生故。引導生善故。破壞諸惡故。顯昔第一義故。通說無咎。又佛常依三諦說法。依俗

故說六道安樂。依真故說二乘安樂。依中故說佛菩薩安樂。又不離俗而有真中。尙得即俗即真即中。何意不得六道說通安樂是涅槃耶。龍樹云。因緣所生法。即空即假即中。是其義也。三釋無名者。先出舊解。一云。真如實際等是真諦名。佛果涅槃常樂我淨等是俗諦名。而言涅槃無名者。無生死患累之名而有美妙之名也。引互無爲證。涅槃無生死之名。生死無涅槃之名耳。二云。真諦涅槃俱無名無相。名相所不及。言語道斷心行處滅。引肇論江河競注而不流。日月歷天而不周。豈有名於其間哉。三云。真諦無名。佛果涅槃雖復冥真。猶是續待二假。故涅槃不得無名也。初家。真俗俱有名。第二家。真俗俱無名。第三家。真無名俗有名。應更有第四家。執真有名俗無名未見執者。若定執此墮四倒見。若以四爲方便正是三藏四門。何者若引互無。有美妙之名者。斷莫是三藏有門。能通是有所通是非有。何得用小乘能通釋大涅槃所通。指荒塗爲寶所。認魚目是明珠。大無所以。若言真諦涅槃皆無名者。祇是三藏空門。若言真諦無名佛果涅槃猶是續待二假者。祇是三藏亦有亦無門。復應有計非有非無門者。未見其人也。然三藏涅槃。既非數法。尙不是一何得有四。四者能通之門耳。不可以能通爲所通。縱令跨節是通教四門者。亦不可以通教能通爲通教所通何得以共能通。釋別所通。又跨節爲別教能通者。亦不得以別能通爲別所通。那得以別能通釋圓所通。將此

望之節節無意窮然大遠。故不用此無名釋大涅槃云。問古來傳譯什師命世。升堂入室一肇而已。肇作涅槃無名論其詞虛豁洋洋滿耳。世人既味卷不釋手意復云何。答高僧盛德日月在懷。既不親承其門難見。鑽仰遺文管窺而已。觀其旨趣不出四句。其論云。有餘無餘涅槃者。良是出處之異號應物之假名。若無聖人知無者誰。若無聖人誰與道遊。即其有句也。寂寥虛豁不可以形名得。微妙無相不可以有心知。豈有名於其間哉。即其無句也。果有其所以不有。故不可得而有。有其所以不無。故不可得而無耳。恍忽窈冥其中有精。本之有境則五陰永滅。推之無鄉則幽靈不竭。即其亦有亦無句也。然則有無絕於內。稱謂淪於外。視聽之所不暨。四空之所昏昧。而欲以有無題勝標其方域者。不亦邈哉。即其非有非無句也。然其作論談大意不在小。不可謂是三藏四句也。文云。超度有流言不涉界外之流。大惠永滅不滅涅槃之惠。故不可謂是別圓四句也。辨差中云。三車出於火宅。俱出生死。無爲一也。此以三三於無。非無有三。如來結習都盡。聲聞結盡習不盡。盡者去尺無尺。去寸無寸。修短在於尺寸。不在無也。智鑒有淺深德行有厚薄。雖俱至彼岸而升降不同。彼岸豈異。異自我耳。以此推之歸宗指極。在於三人同以無言說道斷煩惱入涅槃。文義孱然何可隱諱。故知是通教四句也。夫通教詮理非有非數。而以有無四句爲通道之門。若執門求所通。其失一也。

又通教體法之觀非如來本懷隨自意語。乃是俯提枝末隨他意語。故嬰兒行云。不知苦樂晝夜親疏等相。不能造作大小諸事名曰嬰兒。不知苦樂是浪憂喜。不知晝夜是齊明暗。不知親疏是等憎愛。不作大小是亡巨細。三人同學體觀。喻之以嬰兒。俱證無爲喻之以入水。論其智德喻之以三獸。論其斷德喻之以灰斷。宗在他經要非此典。那忽將彼釋。此其失二也。又法華教起已破化城。一切諸菩薩。疑網悉已除。千二百羅漢。悉亦當作佛。佛開通教。方便之門示真實相。云何迫欣三獸更建草庵。其失三也。又譬喻之徒不在法華席者。於哀歎品中更爲分別。汝先所修悉是顛倒。我先所說亦非實語。斥故顯新指劣明勝。云何達經波動水浪握捉瓦礫持作月形其失四也。然綱維既闕網目安寄。執佛法之遺棄謂是真實。徒施於十演終非三德明矣。今言涅槃無名。涅槃者指三德涅槃也。無名者無六道安樂之名也。又無三藏有門見有得道。獲有餘無餘涅槃之名。亦無見空得道。亦無亦空亦有得道。亦無非空非有得道。獲有餘無餘涅槃之名也。又無三乘共行十地有門得道。獲有餘無餘涅槃之名也。亦無空門。亦空亦有門。非空非有門得道。獲有餘無餘涅槃之名也。又無別教有門得道。獲有餘無餘涅槃之名也。亦無空門。亦空亦有門。非空非有門得道。獲有餘無餘涅槃之名也。無如是等諸方便之名。從所離故。故言無名。從所得故。故言涅槃。此即圓教有門之意也。又非離諸名

外。別一涅槃。即諸名無名。便是涅槃。故言涅槃無名。此圓教空門意也。又從所離故。故言無名。從能離故。故言涅槃。能所合稱。故言涅槃無名。此圓教亦空亦有門意也。若有能所則大有名。何謂無名。今無能所稱爲涅槃無名。此是圓教非有非無門意也。門雖有四。涅槃非四也。云云。無名之意。超度爾許諸涅槃名。然後乃顯圓當四門大般涅槃。諸師都未嘗分別一兩節目。即道無名。無何等名。名曰無名。疑誤後生今所不用也。故梵行品云。無緣慈者。不緣衆生亦不緣法緣。於如來故名無緣。今亦例此無六道之名無四聖之名。而有祕藏涅槃之名故言。涅槃無名也。四釋假名者。德王初云。涅槃非名非相。云何而言可得見聞。不可見故無相。不可聞故無名。佛以佛眼佛耳尚不見聞。況復下地及與凡夫而能見聞。大悲方便動樹訓風舉扇喻月。能令機緣而得見聞。其見聞者實無見聞而言見聞。迦葉品云。涅槃一名有無量名。亦名無生無出。乃至亦名甘露亦名吉祥。凡列二十五種示其無量。悉爲衆生而假施設。文云。如坻羅婆夷名爲食油。實不食油無有因緣。強爲立名名爲食油。如經廣說。涅槃亦爾。無有因緣強爲立名名爲涅槃。智度云。名假施設。受假施設。法假施設。實非色心而言色心。是法假施設。於色心上更設五陰十二入十八界等是受假施設。於陰入界上。更立張王李趙等是名假施設。亦如攪色香味觸是法假施設。於四微上。更作根莖枝葉等是受假施設。

根莖之上更立楓栴栴柏等名是名假施設。是大涅槃亦復如是。強指此實法名為佛師。是佛祕藏是法假施設。於佛師上更復分別法身般若解脫三點是受假施設。於三點上更立名字大般涅槃是名假施設。或復呼為洲渚窟宅。或復呼為乳。麤妙味。或復呼為醍醐上藥。或復呼為一闍提。或復呼為一破戒明鏡。譬說虛空不可得無障礙如是豈非名假施設。當知從地獄已上。至佛已還皆言安樂者悉假名也。大論云。衆生無上者佛是。法無上者涅槃是。所以設此假名者。欲令衆生知名非名。名不在內亦不在外。亦不在中間亦不常自有。大品云。菩薩菩薩但有字。佛佛但有字。是字不住。亦不住。是字無所有故。涅槃亦爾。涅槃不在法身。法身亦非。又涅槃不在般若。文云。般若亦非。又涅槃不在解脫。文云。解脫亦非。三德中各求皆不可得。三法合求亦不可得。故智度云。若人見般若。是則為被縛。若不見般若。是亦為被縛。若人見般若。是為得解脫。若不見般若。是亦得解脫。法身解脫亦如是。譬如幻化物不可見而見。見而不可見。是事為希有。此經名為微妙不可思議。但假名字名此三身為祕密藏涅槃。但假名字名此三般若為摩醯三目涅槃。但假名字名三解脫名三點涅槃。但假名字具足三法名大涅槃。但假名字引導衆生。譬如空拳。為喜小兒。為引小兒。為止啼兒。為教點兒。其事辦已。散指舒拳。無拳矣。涅槃亦爾。以新伊悅之。以新伊引進之。以

新伊破之。以新伊悟之。是為假名四種利益。得利益已。寧復執名而起諍乎。假立有名既爾。假立無名。假立亦有亦無名。假立非有非無名亦如是云云。應說將跨來因緣云云。又如治噎法云云。五釋絕名者。有人以無釋絕。亡有而存無。無則不絕。非今所用。有人以離釋絕。言涅槃之中無有諸有。此尚非小乘義。亦所不用。有人以滅釋絕。言滅諸煩惱。悉無所有猶如火滅。存於涅槃者。經稱是邪解邪難。此豈可用耶。有人引經云。如大香象頓絕羈鎖自恣而去。將此釋絕者。此乃三修比丘。偏歎菩薩所絕一邊。義未具足。同上無名之意。非今絕名也。若言語相逐對無說有。乃至對有無說非有非無等。待對不息言則不絕。若以心分別。介爾動念。心起想即癡。心亦不絕。心既不絕。言那得絕。若知心是攀緣三界。攀緣三界生滅是無常苦空無我。息此攀緣心無所得。心絕故其言亦絕。此乃修習言語道斷心行處滅。非真絕也。若入見諦苦忍明發世諦死時名生不生。身子云。吾聞解脫之中。無有言說。亦是解脫之中無有分別。此則真證言語道斷心行處滅。蓋三藏絕意。指此一絕凡絕幾許人法況復餘耶。然入真時絕出觀不絕。何者。真俗異故。一絕一不絕待對宛然。云何名絕。若能道遠乎哉。即事而真。聖遠乎哉。體之即神。見色與盲等。聞聲與聾等。其說法者無說無示。其分別者無所分別。無絕無不絕而名為絕。此亦方便道中。言語道斷心行處滅。若空慧相應入第一義。豁然清淨

無能絕無所絕。無絕者無絕法。此通教絕名意也。此雖冥冥未冥中。雖斷通未斷別。淨名云。結習未盡。華則著身。下文云。無明未吐。迴轉日月。如瘡病者。對界內說界外。想通惑對別惑是則不絕。若能以大涅槃心修行五行具十功德。是時一向專求大涅槃行。無復界內之心。無復界內之說。如是方便。亦名言語道斷心行處滅。而未是冥中。若發中道所得功德不與聲聞辟支佛共。昔所不得而今得之。昔所不絕而今絕之。蓋是別教絕名意也。然證絕之時乃同圓極。而修時梯磴江河迴曲。何者。發心不能遍法界。故法界外更有法故。不名絕法。拙行不能行一行是如來行。如來行外更有行故。不名絕行。非無上方便。方便上更有方便非絕方便。若圓發心觀大涅槃諸心法界。法界外更無復法界。獨一法界故稱絕法界。又如經復有一行是如來行。如來行外更無復行故名獨絕行。又如經正直捨方便但說無上道。尼俱耶洲直入西海猶如直繩。是絕方便。絕方便絕者。如經斷絕一切疑網心。故名為解脫。三藏四門即是法界。即如來行即上方便。何者。生死即是涅槃。況聲聞法生決定心寧起疑網。通教四門亦即法界。共乘疑網斷故。別教四門即是法界。菩薩乘疑網斷故。是名斷絕一切疑網之心。名獨絕解脫。唯說一法界不說餘法界。唯思一法界不思餘法界。是為方便道中。言語道斷心行處滅。是圓方便亦有四門。若謂一切法絕是法界唯一法界。此約有門絕名也。若謂

法界尚無法界事有其餘。此約空門絕名也。若謂法界微妙一法即三法三法即一法。此就亦有亦無門絕名也。若謂法界不可思議。此就非有非無門絕名也。此皆方便道。若謂開示悟入如以金。鐵扶其眼膜。二指三指。了了分明。是名究竟絕言。言滿法界而無一言。心滿法界而無一念。是為圓教絕名意也。然諸經絕名其旨非一。華嚴云。如執虛空風如畫虛空中。說之已自難何況以示人。淨名云。諸法不相待一念不住故。又諸菩薩言於言。文殊言無言。淨名杜口絕言。善吉云。我無所說不覺不得。龍樹云。若法為待成。是法還成待。今則無因待亦無所成法。今經云。譬如虛空不因小空名為大也。涅槃亦爾。不因小相名大涅槃。云何小相。從二乘所證乃至生死安樂皆是小相。不因此小而名大也。又云。譬如法不可稱量不可思議。乃名為大。涅槃亦爾。不可稱量不可思議。故名為大。當知絕名涅槃其義顯矣。斯文甚多。逗緣亦異不可一概。今以四句料揀。謂不絕絕。非絕非不絕。絕絕。云何不絕。如前六道安樂等。云何為絕。如三藏通共。云何非絕非不絕。如別四門等。云何絕絕。圓四門是也。云何絕絕。絕能絕所。故言絕絕。從別教四門已下名為所絕。從圓教四門名為能絕。以能絕絕所絕。能絕亦絕。如前火木然於草已亦復自然。當知絕名與無名為異。義在此也。故言絕絕。大總結釋名一章開為五重。都是圓教四門意也。若大涅槃名真善妙有。本自有之非適今也。

此是有門義。故作翻名同名釋之。若大涅槃空迦毘羅城空此是空門義。故作無名釋之。若大涅槃亦色非色。此是亦空亦有門義。故作假名釋之。若大涅槃名為中道遮二邊故。此即非空非有門義。故作絕名釋之。夫大涅槃者。尚非是一。云何為四。四者門也。門以標理。有種種名。如天帝釋有千種名。解脫亦爾。多諸名字。名字功德品云。涅槃是名其餘稱數是則為字。若爾涅槃是總。而當機立之為名。三點等及餘一切皆屬於字。若法身當機是總已復為名。涅槃及一切物已復屬字。若爾更互無定。雖復無定今既定以涅槃為名。若定不定若總若別皆無待對。悉是不可思議。悉是大絕。故名絕大涅槃也。

第二釋涅槃體。先出舊解。莊嚴云。佛果涅槃出二諦外非真俗攝。凡夫以惑因感果是浮虛世諦。假體即空故是真諦。佛果非惑因所感故非世諦。不可復空故非真諦。引仁王經云。超度世諦第一義諦。住第十一薩雲若地也。開善云。佛果涅槃還為二諦所攝。體是續待二假故是世諦。即此二假可空故是真諦。佛果靈智亦復冥真也。冶城秀云。佛果涅槃非世諦。是真諦微妙寂絕。故云世諦死時名生不生。龍光云。佛果涅槃具相續相待二假即世諦。乃即真之義而不冥真。若冥真同頑境。即無靈智故非真諦也。有人難此四解。若佛果出此二諦外即應非有為非無為。汝義中那云佛果一向是無為。若為二諦所攝佛果應是亦有為亦無為。若佛果是真諦。真諦不可說於衆生無用。若佛果是俗諦佛果一向是有為。此皆成論師說。自相矛盾都不愜人情。亦不稱肇論。論云。不可形名得不可有心知。言之失其真。知之反其愚。有之乖其性。無之傷其軀。肇意推之墮在四見。佛法邊外尚非小涅槃門況小涅槃體。尚非小涅槃門體焉得是共別涅槃門體。尚不是共別門體何得是大涅槃體耶。經云。是諸人等。春陽之月。乘船遊戲。失琉璃寶。即共入水。競捉瓦石歡喜持出。謂琉璃珠。都非真寶。是珠澄淨清淨故在水中。猶如仰觀虛空月形超然獨遠。非衆人所執。亦非衆官所觸。古來復約三聚論涅槃體言。佛地一向有心聚。一向無無作聚。色聚亦有亦無。無色有妙色。引經因滅是色獲得常色。六卷云。妙色湛然常安隱云云。又一解。色是頑。不可研進。故佛地無色無無作。唯有靈智獨存。經道色者能應為無窮之色。又妙果顯現義說為非色。引文。願諸衆生滅一切色。入於無色大般涅槃。又分別兩界有色一界無色。又四空無色者無龜色耳。三界並有色。界外變易則無色。六地已還身在分段故有色。七地已上身在界外則無色。又七地是兩國中間猶有光影色。八地已上則無色。又言金心猶有色。故經言。意生身者雖無一期壽命但有念念生滅名為變易。故言意生身。身者猶有色也。唯佛地無復色耳。無作者金剛已前皆有無作。唯金心無心無無作也。有人難此義。若涅槃定有色。應有長短質像。須依食住處。若定無色心無

所依。豈可有而無色。若色須離心是取相何意不離。如是等釋皆是妄語。猶如盲跛。見佛亦盲跛。王語諸臣我庫藏中無如是刀。不須多難也。

大般涅槃經玄義卷上

大般涅槃經玄義卷下

*隋天台沙門灌頂撰

古來復約三性。明涅槃體。言佛地。一向是善性。一向非惡性。無記性亦有亦無云云。光宅云。常住佛果。有兩種無記。一知解無記。二果報無記。如棋書射御。闡提亦有故非是善。佛地亦有故非是惡。即是無記性也。果報者。如生死苦無常報。既非是惡。只是無記。涅槃地常樂我淨亦非是善。直是無記。開善莊嚴並言。佛無無記。唯一善性。知解無記。有多釋。莊嚴云。是善性。開善云通三性。在闡提是惡。在佛是善。在餘人是無記。言果報者。生死中多有異具故。果報可是無記。佛果報何以是無記。佛果唯一習果。無復報法豈得類此。是無記。以習善既滿。併成習果也。夫三性者。若有若無。只是世俗尚不是真。何得用此釋涅槃體。此皆數論之極說安處佛體。如野人暴背獻至尊耳。今明涅槃體者。上來釋名論無。無一切方便。論絕絕能絕所。名下妙理寧可思議。德王云。大般涅槃非色非聲。云何而言可得見聞。古來諸師云何以色為涅槃體。又

經云。夫涅槃者。不從因生。體非是果。古來諸師云何以佛果釋涅槃體。又涅槃之體無定無果。古來諸師云何謂涅槃體定是一法。當知其體非色非聲。非因非果。非一非異。非諸聲聞緣覺所知。亦非十住能了了見。不能默已。強作五種言之。一約性淨涅槃。二約法身德。三約一諦。四約不生不生。五約正性。初論性淨。總指一部。次論法身指哀歎。次論一諦指聖行。次論不生指德王。次論正性。指師子吼迦葉等。不可備引。斑駁略周耳。性淨者。淨有三種。一方便淨。二圓淨。三性淨。方便淨者。嘔和善巧。權能逗物。住首楞嚴。建于大義。或一闍浮提。或一四天下。或一大千界。或十方土。隨諸衆生應可調伏種種示現。無生而生。王宮七步。無滅而滅。倚臥雙林。是以晨朝放光。大聲遍告。正覺世尊將欲涅槃。若有所疑。今速可問。為最後問。所以三界躡踊。八部悲號。獻供填空。流血洒地。高幢翳諸日月。廣蓋遍覆大千。如經廣說。乃至下者作九法界身。非生現生。非滅現滅。不前不後。一時等現。然於寂滅。無所損減。於諸生死。無染無累。故名方便淨涅槃也。圓淨者。因圓果滿。畢竟成就。原其初基。以大涅槃心。行如來行。持戒不殺。擁護正法。廣宣流布。利益衆生。迴向大乘。感得金剛堅固之體。法身常身圓滿具足。獲大涅槃。修道得故。安住於此秘密藏中。復能廣宣廣說。一切悉有佛性。施與一切。常命色力安無礙辯。雖破煩惱亦無所破。雖圓智慧。亦無能圓。雖施衆生。不得衆生及以施相。

是名圓淨涅槃也。性淨者。非修非得。非作業非與業。本自有之。非適今也。沖湛寂靜。不生不滅。雖在波濁。波濁不能昏動。猶如仰觀虛空月形。五翳不能翳。雖復隨流苦酢其味真正。停留在山。雖沒膚中。膿血之所不染。故名性淨涅槃也。此三涅槃。不可相離。即三而一。不可相混。即一而三。雖復一三。即非一三。雖非一三。而復一三。會之彌分。派之彌合。橫之彌高。豎之彌闊。微妙莫測。不可思議。今欲分別令易解故。總唱涅槃。即是其名。專據性淨。以當其體。指於圓淨。即是其宗。方便善巧。以為其用。作此分別。即是其教。雖復分別。都是一法。所謂大乘。大般涅槃。若得此意。無俟多言。其未解者。更重復說耳。二約法身德者。德有三種。一法身德。二般若德。三解脫德。法身者。即是金剛。堅固之體。非色即色。非色非非色。而名為真善妙色。真故非色。善故即色。妙故非色非非色。又真即是空。善即是假。妙即是中。例一切法。亦復如是。以是義故。名為佛法名佛法界。攝一切法。名法身藏。名法身德也。般若德者。即是無上調御。一切種智。名大涅槃。明淨之鏡。此鏡一照一切照。照中故是鏡。照真故是淨。照俗故是明。明故則像亮。假顯淨故。取盡真顯。鏡故體圓中顯。三智一心。中得故。言明淨。攝一切法。故稱調御。是佛智藏。名般若德也。解脫德者。即是如來自在解脫。其性廣博無縛無脫。是廣博義。體縛即脫。是遠離義。調伏衆生。是無創疣義。如是解脫。攝一切法。亦名解脫藏。亦名解脫德。如是

三德。不可相離。文云。法身亦非。乃至解脫亦非。如是三德不可相混。文云。三點具足。無有缺減。當知雖一而三。雖三而一。雖復三一。而非三一。雖非三一。而三而一。不可思議。攝一切法。攝一切人。文云。我及諸子。四部之衆。悉皆入中。微妙難思。爲若此。今欲分別令易解。故總唱祕藏。以當其名。法身攝一切法。不縱不橫。以當其體。般若攝一切法。如一面三目。以當其宗。解脫攝一切法。如三點伊。以當其用。如此敷演。卽是其教。非但經體義明。餘義亦顯。云云。三約一諦者。世人解諦。或境或智。或教非無此義。今用理釋。諦。理當卽境正。境正卽智教皆正。以理釋諦。其義爲允。有四種四諦。一生滅四諦。集是能生。苦是所生。能生所生。所生還生。能生苦集迴轉。生死無已。道名能壞。滅是所壞。所壞亦壞。能壞亦壞。所壞更互生滅。故稱生滅四諦。若論其相。逼迫生長能除所除等是也。如經。二無生四諦者。推苦集之本。本自不生。不生故則無苦集。既無所壞。亦無能壞。故稱無生四諦。論其相者。解苦無苦。而有真諦。集道滅亦如是。如經。三無量四諦者。分別校計苦集滅道。有無量相。非諸聲聞緣覺所知。如經。四一實四諦者。解苦無苦。而有於實。乃至解滅無滅。而有於實。實者。非苦非苦因。非苦盡。非苦對。而是一實。乃至滅亦如是。是名一實四諦。具如經。非離生滅四諦。別有一實四諦。卽達生滅而是一實四諦。無生無量。亦復如是。一中有無量。無量中有一。不可思議。不可說示。強

欲分別令易解故。總唱一實四諦。卽是名也。取一滅諦。卽是其體。故勝鬘云。一依者。卽一滅諦也。道諦以當其宗。取道諦所治。以當其用。調御心喜。說此真諦。卽名爲教。雖差別說。只是一無差別法耳。此中遺一章五約正性者。性有五種。謂正性因性。因性果性。果性正性。正性者。非因非因。非果非果。是名正性。因性者。十二因緣。因性者。十二因緣所生智慧。果性者。三藐三菩提。果性者。大般涅槃。今且約一事論之。五陰下所以卽正因佛性。五陰卽因性。觀五陰生智慧。是因因性。此智慧增成。是果性。智慧所滅。是果果性。於陰既然。餘一切法亦爾。當知五性亦非條別。卽一而五。卽五而一。一而不混五。五而不離一。不可思議。不可說示。強欲分別令易解故。指果果性爲名。指正性爲體。指因性果性爲宗。指因性爲用。作此分別五性爲教。雖復分別。只是一法。更無差別。若人能如此解者。非但識體。於名宗用教。觸事冷然。爲未解者更論宗耳。第三明涅槃宗者。有人言。宗體不異。是義不然。何者。若論至理。二卽不二。不二卽二。此則宜然。若論名事。不二不可爲二。二不可爲不二。既立宗體。寧得是同。宗者要也。修行。禪莫過因果。此經明因。略有三種。一破無常修常。如哀歎品。以常樂我。斥諸比丘無常。苦無我。虛僞不真。宜應捨離。今當爲汝說勝三修。此是破無常修於常。能得常果。顯於非常。非無常。煩惱爲薪。智慧爲火。以是因緣。成涅槃食。令諸弟子。悉皆甘嗜。劣三修是煩

惱薪。勝三修是智慧火。非常非無常。是涅槃食。四衆安住祕密藏中。卽是甘嗜。又云。如來體之。是故爲常。體者履也。履而行之。法常故佛亦常。亦是法非常非無常故。佛亦非常非無常也。問初爲純陀。直說一常。次明常住二字。次斥諸比丘。云勝三修。何意增減。答皆是今昔相對。昔說四非常。總是一無常。今論四德總是一常。舉總常破總無常耳。昔說生死無常。而復流動。今以常破生死。以住破流動。故舉二字。以破二耳。諸比丘置事緣理。但修三想。今舉勝理破劣理。但用三修。云云。二者。以大涅槃心修從淺至深。次第行學。如聖行中。專行五行。初謂戒定慧。居家如牢獄。梵行若虛空。從頭至足。其中唯有髮毛爪齒大小腸胃。觀察八苦五盛陰等。次解苦無苦。而有真諦。次分別校計。苦集滅道。無量無邊。次非苦非集非道非滅。而有實諦。廣說如經。修是行已。得二十五三昧。住大涅槃。況出諸佛功德。不復可說。當知從淺至深。成因克果。顯非因非果。始終莫不以常爲宗。德王品中亦如是。初觀四大如篋五陰如害。六塵如賊。愛如怨詐。煩惱如河。八。正如筏。運手動足截流而去。得到彼岸。戒定如動足。智慧如運手。涅槃是彼岸。師子吼中。亦如是。初從少欲知足。乃至住大涅槃。又善修戒。不見戒因戒果戒一戒二等。是名善修。定慧等。亦復如是。原始要終。皆宗常住。以常爲宗明矣。三者如聖行中云。復有一行是如來行。所謂大乘大般涅槃。大乘卽是修

因。涅槃即是得果。大乘爲因。何所不運。大涅槃果何所不克。一切無闕人。一道出生死。莫復過此。大略可知不復委說。但此文中。處處論行。或修十想。或知根知欲。種種不同。不出三種。初破無常而修常。即是以圓接小接通意也。次以大涅槃心修無常。次修於常。即是從漸入頓次第別意也。後即無常而修於常。即圓頓人也。雖三不同。悉以常爲因。歸宗常果。住大涅槃。等無有異。故文云。因雖無常。而果是常。即第二番意也。餘例可知云云。問明體一章。即識五意。明宗亦爾否。答例然宗有三義。一宗本。二宗要。三宗助。宗本者。諸行皆以大涅槃心爲本。本立道生。如無綱目不立。無皮毛靡附。涅槃心爲本故。其宗得立也。宗要者行之宗要。要在於常。行會於常。能顯非常非無常。如七曜之環北辰。似萬川之注東海。行以常爲要。亦復如是。宗助者。助名氣力也。常宗得成。賴於資助。或人助。或教助。或行助。或道助。由助得力。故言宗助。總此三。宗是釋名。專論宗本。即體意。專明宗要。即宗意。專明宗助。即用意。分別此三。異餘法門。即教意。第四釋涅槃用者。爲三。一本用。二當用。三自在起用。本用者。先出舊解。靈味小亮云。生死之中。本有真神之性。如弊帛裏黃金。像墮在深泥。天眼者。提取淨洗開裹。黃金像宛然。真神佛體萬德咸具。而爲煩惱所覆。若能斷惑佛體自現。力士額珠貧女寶藏。井中七寶。閻室瓶盆等喻。亦復如是。此皆本有有此功用也。新安述小山瑤解云。衆生心神不

斷。正因佛性附此。衆生而未具萬德。必當有成佛之理。取必成之理爲本有用也。開善莊嚴云。正因佛性一法無二理。但約本有始有兩時。若本有神助。有當果之理。若能修行。金心謝種。覺起名爲始有。始有之理。本已有之。引如來性。貧女額珠。閻室等。證本有。引師子迦葉。明乳中無酪。但酪從乳生。故言有酪。酪非本有。必假醲暖。種植胡麻。答言有油。油須搗壓。乃可得耳。又引佛性。三世衆生。未來常有清淨莊嚴之身。此證當有。雙取二文。意與瑤師不異。又引木石之流。無有成佛之理。則非本有之用。衆生必應作佛。今猶是因。因是本有果是始有。本有有始有之理。即是功用義也。有人難初義。若言衆生身中。已有佛果。此則因中有果。過食中已有糞。童女已有兒。若已具佛果。何故住煩惱中。坐不肯出耶。何故不放光動地。故文云。若言有者。何故默然正破此執耳。次難第二有得佛之理。此理若常爲相續。常爲凝然常。若相續常。何謂本有佛果之理。若凝然常。則因中有果。過同於前。難第三家。若言本有具始有。亦應本有常住。復有無常。本有只得是常。不得無常者。本有只本有那得有始有。又若本有有始有。亦應無常有於常。無常不得有於常。本有那得有始有。又本有有始有。則了因有生因。若了因了本有是常。生因生始有是無常。不得相有者。今本有那得有始有耶。鵝蚌相扼。更互是非。由來久矣。今當宣明此義。若定執本有當有。非三藏通教之宗。乃是別圓四門意。

本有是有門。當有是無門。雙取是亦有亦無門。雙遣是非有非無門。別家偏據不融門理兩失。爲圓家所破。何者。若執本有之用。譬之樹木。工匠揆則任曲者。梁用直者。析用長者。短者。箭用本有之用。亦復如是。佛即破之。草木生時。無梁箭用。工匠所裁。因緣獲用。若裁曲爲直。曲無梁用。展直爲曲。直無析用。割長爲等。長無稍用。折短爲薪。短無箭用。何得苦執本有之用。經云。三世有法。無有是處。何得苦執本有當有。當本不立。勝用安在耶。若專難破。復失適緣。何者。理非本非當。非亦本當。非非本當。有四利益。或言本有即是常用。或言當有即是無常用。或亦當亦本即常無常雙用。或非當非本。即雙非不用之用。本有常用。攝一切法。何得無三門用。三門亦攝一切法。何得無本有常用文云。大般涅槃是諸佛法界。即其義也。是爲圓教赴緣。論此四用。大獲利益。不同舊義云云。二當有用者。先出舊解。解有三。一云。理出萬惑之外。須除惑都盡。乃可見之。譬十重紙裏柱。雖除九重。終不見柱。併盡乃見。二引漸備經。明一切智慧皆漸漸滿。不可一期併悟也。三云。真諦可漸知。佛果可頓得。何者。即俗而真。更非遠物。所以真可分知。佛果超在惑外。不即生死。故不可漸知。有人難初義。若理不可漸見。惑豈可漸除。既不見理。由何除惑。若言理可漸見。夫理若是分。可作分知。理既圓通。若爲漸解。若初見稱。後見與後無異。不名漸見。若初不稱。後不名頓見云云。若言見真者。須漸。得佛須頓。

是義不然。釋論云。若如法觀佛般若與涅槃。是三則一相。華嚴云。虛妄多分別生死涅槃。迷惑聖賢法。不識無上道。真與涅槃既其不異。云何真漸果頓耶。今明諸解更相馳逐。水動珠昏。然理非遠近。見理之智寧得漸頓。智若漸頓寧得稱理。如方入圓殊不相應。如理而解解如於理。不見相而見。無所得即是得耳。有因緣故亦得漸頓。此中應有四句。漸漸漸頓頓漸頓漸。漸漸尚非漸頓。況復頓漸。漸頓尚非頓漸。復復頓頓。法華玄廣說。頓漸者無差別中差別耳。頓漸者差別中無差別耳。三種修三種見明宗中意是也。漸頓修漸頓見者。是不定觀意也。漸更不同又開四句。漸修漸見。漸修頓見。漸修頓漸見。漸修非頓漸見。見此一句意餘三句亦可解。四四十六句不同。當知顯體之用甚多。那只作一兩種解耶。文云王家力士一人當千。種種技藝能勝千。故一人當千。又云。譬如大地草木為衆生用。我法亦爾。當知用同草木比大力士。故知用不一也。舊論照境之用不同。問。俗有三世流動。萬境去來佛智若為照之。若逐境去來則生滅無常。若不逐境去來則不與境相稱。由此一問七解不同。冶城嵩云。佛智乃無大期死滅。猶有念念流動逐境去來。此人臨終舌爛口中浪語之過現驗也。二藥師解。佛智體是常住。用是無常逐境去來。此解亦違經。經云。若正見者當說如來定是無為。那忽體是無為用是有為。三光宅云。若無常之智照常住境而不逐境是常。今常住之智照無

常之境。豈應逐境無常。此亦不可。四作九世照境義明。此境雖在未來。復有當現在當過去義。今遂來現在及過去我皆照竟。所以不生滅也。此亦不可。向在未來時猶是當現在未正現在。今遂來在現在即作正現在。照當知已息。豈不生滅耶。五作逆照義云。如來道迎正覺時初一念併逆照萬境。從初流來至後成佛併皆照竟。後萬境自有去來我都不更新照。如天子初登極時。併付制法後人犯者。隨輕重治不更復制也。此亦不可。佛智照境何嘗暫息忽言初照後都不照。縱令如此終不與境相稱。六開善云。佛在因日導發初心已能橫照數境豎照數時。次入初地一念橫照百法豎照百時。二地千法乃至佛地一念橫照萬法豎照萬時。如懸鏡高臺。此亦不可。鏡照先無而後有未免無常之難。七靈味更借虛空為喻。萬物在空空不生滅物自去來。此亦不然。佛智靈知豈同頑空。今明三藏教中二諦不相即。故二智各照。所以諸解喧喧若此。若通教中。二諦相即二智二而不二。尚無此諍。況復三諦即一諦。一諦即三諦。三智即一智。一智即三智。一照即一切照。一切照即一照。非一非一切不可思議。寧復有此微淺問答耶。又開善解。佛智照真與真冥。無復智境之異。智體與真境都復不殊。約位分別。凡夫不冥不會。因中聖人會而不冥。佛果亦冥亦會。第二解云。佛智是靈知真諦是無知。二體既殊。豈可併有知同無知。但會之既極詬之為冥。豈得有冥異會。慧印三

昧經云。冥不冥寂不寂。肇論亦有用冥體寂之語。今難。佛之真智既其冥冥與真不異。佛之俗智亦應冥俗與俗不異。佛雖知幻而非幻人。若爾佛雖知俗不可冥俗。佛雖冥真不可同真。不應作如此冥真冥俗義。冥真不出二乘。冥俗不出凡夫境界。云何得是佛智用耶云云。三自在起用。用遍法界廣不可委。文云譬如大地一切草木為衆生用。我法亦爾。當知勝用無量無邊。且約三種。一不可思議用。二二鳥雙遊用。三善惡邪正雙攝用。不可思議用者。舊釋有七。一云令他見須彌入芥子。其實不入。唯應度者乃能見之。此解不可。若不入者何謂神通。二解實入。但佛神力廣大令小開小令大。此亦不可。若爾乃以大小何謂以小容大。三解不知入與不入。既是不可思議。那可定判入與不入。此亦不可。佛果上地皆是不可思議。盡應不可解。餘者盡言可解。至此一義獨言不知耶。四若有則相妨。小大皆空故相容。此亦不可。若其皆可何所論入。亦無大小也。五大中有小性小中有大性。以芥子之大性容須彌之小性。此亦不可。若執定性過同外道。又似毘曇。又還是大容於小。何謂以小容大。六地論解。大無大相。不無無相之大。小無小相。不無無相之小。以無相之小。容無相之大。無相之大。還入無相之小。此亦不可。大小本是相既言無相那有大小。若有大小應是有相。若定無相還同空也。七興皇云。諸法本無大小。因緣假名相待假說大為小。假說小為大。說大為小。小是